

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On the temporality of dynamic predicates in present-day Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 嘉一郎, Fukuda, Yoshiichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/714

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



現代日本語の動的述語の テンポラリティについて

福 田 嘉一郎

はじめに

筆者は、福田(2002)において、現代日本語の静的述語のテンポラリティ(時制性)について論じ、一般化を試みた。その一部を、福田(2003a)、福田(2003b)での考察に基づき修正したうえで示すと、(1)~(3)のようになる。

- (1) 現代日本語における主節の述語のテンポラリティは、述語が表す事態の時と発話時との関係によってではなく、話者がその事態を観察する時と発話時との関係によって決定する。
- (2) 話者が確言の文を用いるための必要条件として、主節述語の観察時が発話時以前(過去)である場合、話者は主節述語が表す事態についての直接情報を、実際に取得していなければならない。
- (3) a. 歴史的叙述の語り手とは、過去に存在したあらゆる事態についての直接情報を取得しうると想定されている話者のことである。
b. どの話者も、話者自身に関する過去の事態について取得した情報は、すべて直接情報として扱うことができる。

(1)~(3)の一般化は、静的述語だけでなく動的述語にも適用されるものと考えられる。ただし、静的述語と動的述語とでは、それぞれが表す事態についての直接情報の性質が異なると見られる。すなわち、(4)の仮説のとおりである。

- (4) a. 静的述語とは、それが表す事態についての直接情報が、状態(静

止画)として与えられる蓋然性のある述語のことである。

b. 動的述語とは、それが表す事態についての直接情報が、運動(動画)として与えられる蓋然性のある述語のことである。

本稿では、(4)を支持する現象を挙げ、動的述語の場合の(1)を証明する。さらに、(2)・(3)との関連において、述語が表す事態についての直接情報が運動となるための必要(十分)条件を明らかにする。

1 静的述語と動的述語の観察時

1.1 観察時とは、その時に、述語が表す事態の現場に話者自身がい{た／る}と設定すれば、事態についての直接情報を取得{した／する}蓋然性があると、話者が考える時のことである。

動的動詞で個別の出来事を表す用法のものが、動的述語となる。静的述語の-非タが現在の事態を表しうるのに対して、動的述語の-非タは通常、発話時よりあとに存在する(未来の)事態しか表しえない。

(5)a. 彼は現在、私の家にいます。

b. 彼は現在、私の家に来{*ます／ています}。

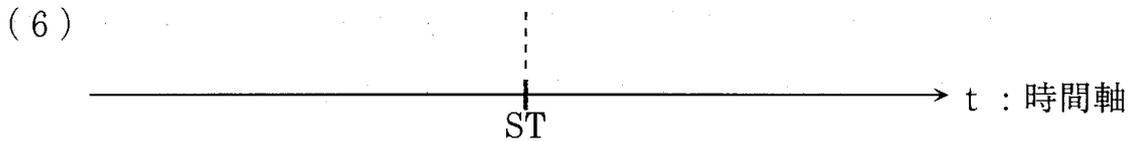
c. 彼はあした私の家に来ます。

(4)は、(5)の現象を合理的に説明することによって支持される。

発話時は通常、時間軸の上を過去から未来へと移動しつつける点ととらえられる。静的述語が表す事態についての直接情報が状態、すなわち時間的な長さを持たないある瞬間であり、点であるとすれば、その情報は発話時において話者に取得される蓋然性がある。つまり、静的述語の観察時は発話時と重なりうる。他方、動的述語が表す事態についての直接情報が運動、すなわち時間的な長さを持ったある期間であり、線であるとすれば、その情報は発話時において話者に取得される蓋然性がない。つまり、動的述語の観察時は発話時とは重なりえない。たとえて言うなら、発話時が点であるかぎり、そこに静止画をダウンロードすることはできても、動画をダウンロードするこ

とはできないのである。

1.2.1 発話時をST (Speech Time) とすると、STは通常、時間軸の上を過去から未来へと移動しつづける点ととらえられる。(6)を見られたい。

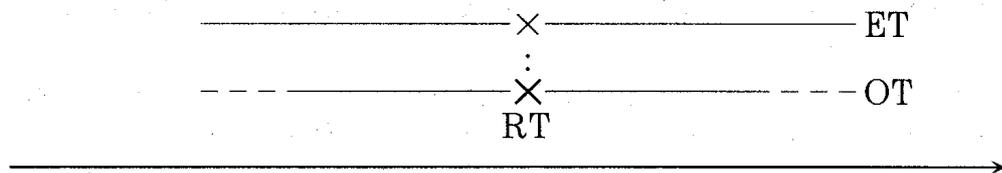


述語が表す事態の時を事態時 ET (Event Time), 話者がその事態を観察する時を観察時 RT (Reference Time) とすると、静的述語の場合、話者は事態のごく一部でも状態として観察すればよい。したがって、RTは長さを持たない瞬間、点となる。また、話者は ET 中のあらゆる時点に RT を設定できるとは限らない。そこで、話者が RT を設定できる期間を観察可能時 OT (Observability Time) とすると、 $RT \subset OT \subseteq ET$ (RTはOTに含まれ、OTはETに含まれるかETと一致する) の関係が成り立つ。

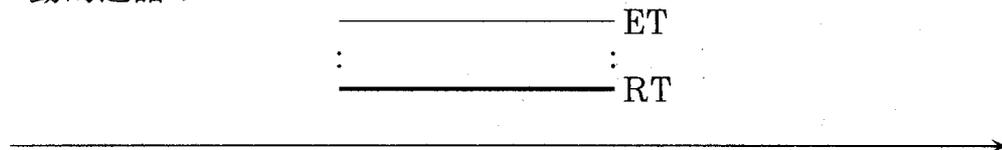
それに対して動的述語の場合、話者は事態の全部を運動として観察しなければならない。すなわち、 $RT = ET$ (RTはETと一致する) の関係が成り立つ。そして、どのような ET にも長さがあるので、RTは一定の長さを持った期間、線となる。

上のことを図示すると、(7), (8)のようになる。¹

(7) 静的述語 :



(8) 動的述語 :



1 いわゆる不完成相 (Imperfective) の動詞は静的述語に属し、完成相 (Perfective) の動詞は動的述語にあたる。従来、不完成相は事態を線的にとらえ、完成相は事態を点的にとらえるとしてきたけれども、静的述語と動的述語の観察時 RT については逆である。

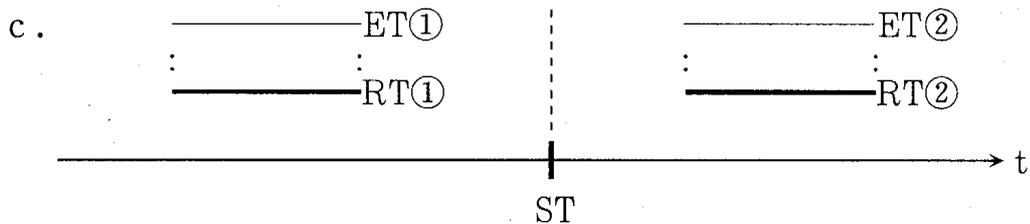
以上の規定に基づいて(1)を書き換え、(1')の一般化を提示する。

(1') 現代日本語における主節の述語のテンポラリティは、(ETとSTとの関係によってではなく) RTとSTとの関係によって決定する。すなわち、述語は $RT < ST$ (RTがSTより前) のとき - タをとり、 $ST \leq RT$ (RTがSTと一致するかSTよりあと) のとき - 非タをとる。

1.2.2 動的述語の場合、(1')は、(9)のような例によって支持される。ただし、 $RT = ET$ が成り立つので、- タと - 非タの対立を、ETに依拠するものと見ても、RTに依拠するものと見ても、表面上は同様に解釈される。

(9) a. 私はきのうその映画を観 た / *る。[$ET① = RT① < ST$]

b. 私はあしたその映画を観 *た / る。[$ST < RT② = ET②$]



動的述語では、RTは一定の長さを持った期間、線であるから、通常長さを持たない瞬間、点であるところのSTと、RTとは一致しえない。動的述語の - 非タが、原則としてST現在の事態を表さず、ST以後の事態を表すのは、そのためである²。STにおいて存在する事態を動的動詞で表すには、- テイルや - ツツアルを用いるなどして、静的述語に変えなければならない。

2 発語行為にも一定の時間が物理的には必要であり、それによって発話時STを線ととらえるならば、動的述語のRTもSTと一致しうるので、その場合、動的述語の - 非タが例外的にST現在の事態を表すことになる。高橋(1985: 157-160)によれば、次の3種の場合がある。

- i) 「成立時を予測できる瞬間的な動作の成立」
 - ・ピッチャーが取って、一塁の吉村に送ります。
 - ・伊三郎軍配を返します。
- ii) 「自分の瞬間的な動作と同時の発言」
 - ・〔手品で〕これをここに、こう入れます。
 - ・一円ここへおきますよ。
- iii) 「行為の実現となる発言」
 - ・あとを万事おねがいます。
 - ・和賀英良に対し、逮捕状を請求致します。

iはスポーツの実況放送などでよく聞かれる。iiiはいわゆる遂行的動詞による表現である。

2 動的述語であるための条件

2.1 述語が動的述語である，すなわち，述語が表す事態についての直接情報が運動となるためには，一定の条件が満たされなければならない。このことに関して，(10)のような仮説を立てる。

(10) a. 述語が表す事態が，事態に関与するものの状態の変化を伴う場合，事態についての運動としての直接情報は，変化の前の状態とあとの状態とを含んでいなければならない。

b. 述語が表す事態が，事態に関与するものの状態の変化を伴わない場合，事態についての運動としての直接情報は，事態の全過程の状態を含んでいなければならない。

まず，(10) a は，(11)，(12)のような例によって支持される。

(11) a. 彼はきのうここに来ました。

b. #その老人は子供のころここに来ました。

(12) a. 彼は去年家を建てました。

b. #織田信長は天正年間にその城を建てました。

(11) a，(12) a では，話者は変化の前と変化のあと（事態の主体が来る前と来たあと，事態の客体が建つ前と建ったあと）の状態をともに把握しうる³。それに対して，(11) b，(12) b では，話者が少なくとも変化の前の状態を把握しえないので，(2)の制約により，このような確言の文は通常は不適合となる。ただし，(3) a により，歴史的叙述においては適合であろう。

これに関連して，(13)，(14)を見られたい。

(13) その老人は子供のころここに来たそうです。

(14) 織田信長は天正年間にその城を建てたようです。

(13)，(14)のような概言の文の場合は，述語が表す事態についての直接情

3 (11) a，(12) a の場合，述語が表す事態についての直接情報を話者が取得していることは，確言の文を用いるための十分条件ではない（(2)参照）。確言のためには，直接情報の内容が，確言を導くに足る確実性を備えていなければならない。

報を、話者が実際に取得している必要はない。⁴

次に、(10)b は、(15)、(16)のような例によって支持される。

(15) a. 私はその TV ドラマを見ました。

b. #彼はその TV ドラマを見ました。

(16) a. 私はきのう 7 時間眠りました。

b. ?彼はきのう 7 時間眠りました。

(15)、(16)の述語は、事態に関与するものの状態の変化を伴わない事態を表している。(15) a、(16) a では、事態の主体が話者自身なので、(3) b により、事態の全過程の状態を話者は把握しうる。それに対して、(15) b、(16) b のように、事態の主体が他者である場合、事態の全過程の状態を話者が把握するということは、通常は考えにくく、したがって(2)の制約により、このような確言の文は不適格となる ((15) b は(3) a により歴史的叙述においては適格)。

これに関連して、(17)、(18)を見られたい。

(17) a. 彼は私と一緒にその TV ドラマを見ました。

b. 彼は私の顔を見ました。

(18) a. [映画 *The Truman Show* (1998) のように、「彼」のすべての行動がビデオ撮影されている状況で] 彼はきのう 7 時間眠りました。

b. 彼は一瞬眠りました。

(17) a、(18) a に見るように、述語が表す事態の主体が他者であっても、事態の全過程の状態を話者が把握しうる特殊な状況の下では、確言の文を用いることができる。また、(17) b、(18) b では、他者を主体とする事態がごく短い時間のうちに収まるものであるために、事態の全過程の状態を話者が把握しうるのである。

4 概言の文は、主節の述語について、観察時の定義における「蓋然性」(1.1 参照)があるということを示すのみである。概言のモダリティ(叙法〈ムード〉性)には、推量と推定・伝聞とがある。推量のモダリティは主に、述語の - 非タ / - タが - ダロウ、 - カモシレナイ、 - ニチガイナイ等の形式を伴うことによって表され、推定・伝聞のモダリティは主に、述語の - 非タ / - タが - ヨウダ、 - ラシイ、 - ソウダ等の形式を伴うことによって表される。

さらに、(19)、(20)を見られたい。

(19) a. 彼はその TV ドラマを見たでしょう。

b. 彼はその TV ドラマを見ていました。

(20) a. 彼はきのう 7 時間眠ったそうです。

b. 彼はさっき眠っていました。

(19) a, (20) a のような概言の文の場合は、述語が表す事態についての直接情報を、話者が実際に取得している必要はない。また、(19) b, (20) b に見るように、主節の述語を静的述語とするなら、(4) a により、話者は、述語が表す事態の過程に属するある一状態さえ把握していれば、確言の文を用いることができる。

2.2 話者は、述語が表す事態について、直接的か間接的かを問わず何らかの情報を取得している場合と、何の情報も取得していない場合とがある⁵。述語が表す事態についての何らかの情報を話者が得た時を情報取得時 TGI (Time of Getting Information) とすると、TGI は、時間差の大小はあるが、必ず発話時より前になる (常に $TGI < ST$)。これは、発話時が時間軸の上を移動しつつける点であることによる。

現代日本語の述語の文法において、TGI は次のような点で重要である。すなわち、 $RT < ST$ のとき、 $RT \neq TGI$ (RT が TGI と一致しない) ならば、歴史的叙述の場合を除いて、話者は確言の文を用いることができない。

(21) a. 彼はきのうここに来ました。 [$RT = TGI < ST$] (= (11) a)

b. その老人は子供のころここに来 {? ました / た そうです}。 [$RT < TGI < ST$] (= (11) b / (13))

(22) a. 彼は去年家を建てました。 [$RT = TGI < ST$] (= (12) a)

b. 織田信長は天正年間にその城を建て {? ました / た ようです}。 [$RT < TGI < ST$] (= (12) b / (14))

5 確言、推定・伝聞の文は情報を取得している場合にのみ用いられ、推量の文は情報を取得していない場合にのみ用いられる ((24) 参照)。

- (23) a. 私はそのTVドラマを見ました。[RT=TGI<ST] (= (15)a)
 b. 彼はそのTVドラマを見 {? ました / た そうです}。[RT<TGI<ST] (= (15)b)
 c. 彼は私と一緒にそのTVドラマを見ました。[RT=TGI<ST] (= (17)a)
 d. 彼は私の顔を見ました。[RT=TGI<ST] (= (17)b)
 e. 彼はそのTVドラマを見ていました。[RT=TGI<ST] (= (19)b)
- (24) a. 彼はきのう、私が訪ねた時、家にいました。[RT=TGI<ST]
 b. 彼はきのうどこにいましたか? — おとといのうち合わせで、きのうは家で待機していることになっていましたから、家にい {? ました / ? た ようです / た でしょう}。[RT<ST。TGIなし]
 c. 私の母は結婚する前、事務員 {? でした / だった そうです / ? だった でしょう}。[RT<TGI<ST]

述語が表す事態についての直接情報を話者が実際に取得していれば、必ずRT=TGIとなるので、(21)~(24)は当然の現象である。確言の文の場合、動的述語では、TGIは長さを持った期間となり((21) a, (22) a, (23) a, (23) c, (23) d), 静的述語では、TGIは長さを持たない瞬間となる((23) a, (24) a)。

おわりに

動的述語のテンポラリティに限定していえば、述語の観察時が発話時以後(未来)である場合の現象について、本稿では論じていない。今後の課題としたい。

(2005/10/07)

参照文献

- 井上 優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」。つくば言語文化フォーラム 編 『「た」の言語学』: 97-163。東京: ひつじ書房。
- 井上 優; 生越直樹; 木村英樹 (2002) 「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語」。生越直樹 編 『シリーズ言語科学4—対照言語学』: 125-159。東京: 東京大学出版会。
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって (上) (下)」。『教育国語』 53; 54。
(再録) 奥田靖雄 (1996) 『ことばの研究・序説』: 105-143。東京: むぎ書房。
- 尾上圭介 (1982) 「現代語のテンスとアスペクト」。『日本語学』 1-2: 17-29。東京: 明治書院。
- 金水 敏 (2000) 「時の表現」。金水敏; 工藤真由美; 沼田善子 『日本語の文法 2—時・否定と取り立て』: 1-92。東京: 岩波書店。
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」。『名古屋大学文学部研究論集』 X (文学4)。(再録) 金田一春彦 編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』: 27-61。東京: むぎ書房。
- 工藤真由美 (2004) 「現代語のテンス・アスペクト」。北原保雄 監修; 尾上圭介 編 『朝倉日本語講座6—文法Ⅱ』: 172-192。東京: 朝倉書店。
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 (国立国語研究所報告 82)。東京: 秀英出版。
- 田窪行則 (1993) 「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」。益岡隆志 編 『日本語の条件表現』: 169-183。東京: くろしお出版。
- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」。森山卓郎; 仁田義雄; 工藤浩 『日本語の文法3—モダリティ』: 79-159。東京: 岩波書店。
- 丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンス—独立文と連体節—」。『人文研究』 48-10: 23-60。大阪: 大阪市立大学文学部。
- 福沢将樹 (2001) 「<未然>と<必然>」。『愛知県立大学文学部論集 (国文学科編)』 50: 1-20。長久手: 愛知県立大学文学部。
- 福沢将樹 (2002) 「<未然>と<必然>(続)—ル形の意味論—」。『愛知県立大学文学部論集 (国文学科編)』 51: 1-37。長久手: 愛知県立大学文学部。
- 福田嘉一郎 (2002) 「日本語の静的述語のテンポラリティについて」。『神戸外大論叢』 53-7: 23-42。神戸: 神戸市外国語大学研究会。
- 福田嘉一郎 (2003a) 「現代日本語のテンポラリティと情報時」。『国語学会 2003 年度春季大会予稿集』: 69-76。国語学会。
- 福田嘉一郎 (2003b) 「いわゆる叙想的テンスの出現条件」。『日本語文法学会第4回大会発表論文集』: 133-142。つくば: 日本語文法学会。
- 森山卓郎 (1988) 「アスペクトの類型」。『日本語動詞述語文の研究』: 138-173。東京: 明治書院。
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. New York: Oxford Uni-

- iversity Press.
- Comrie, Bernard (バーナード・コムリー) (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press. 山田小枝 訳 (1988) 『アスペクト』。東京: むぎ書房。
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) "The auxiliary: grounding." *Foundations of cognitive grammar, volume II, descriptive application*: 240-281. Stanford: Stanford University Press.